

大課題名：新① ブドウ園土壌における可給態窒素診断基準の作成 (R2~4) (成長戦略研究)

小課題名：新① 1 ブドウ園土壌における可給態窒素含量の実態把握 (R2~4)

小課題名：新② 2 施肥資材の土壌種類別可給態窒素発現量の解明 (R2~4)

背景とねらい

- これまで、土壌中の可給態窒素（植物が利用可能な窒素）は、カリヤリン酸と異なり分析手法が煩雑かつ長期間（4週間）を要するため、土壌診断が実施されることは少なく、その実態は不明な点が多い。
- 現状、果樹園土壌の可給態窒素については、診断基準（適正值）が設定されていないため、適切な施肥が難しい状況にあり、土壌への過剰蓄積が危惧される。
- 他県では、ナシやクリ等の果樹園で窒素過剰が原因と思われる枯死等の生育障害もみられている。
- ここでは、県内ブドウ園土壌において、近年開発された簡易な可給態窒素分析方法（分析期間1日）により、実態調査を行い、可給態窒素量の診断基準を作成する。
- 併せて、適正な窒素量の投入にあたり、施肥資材からの可給態窒素の発現量を明らかにし、ブドウの高品質・安定生産に向けた施肥技術の確立を目指す。

【課題の要請元】

部門別農業代表者、全農やまなし

試験内容

1. ブドウ園土壌における可給態窒素含量の実態把握 (R2~4)

「シャインマスカット」、「巨峰」等の現地ほ場において、施肥状況、土壌中の可給態窒素量、樹体生育、果実品質等を調査し、土壌の種類別に可給態窒素量の診断基準を作成する。

土壌の種類：砂質土、埴壤土、火山灰土

2. 施肥資材の土壌種類別可給態窒素発現量の解明 (R2~4)

施肥資材からの可給態窒素の発現推移および発現量を、土壌の種類別（砂質土、埴壤土、火山灰土）に明らかにし、窒素施肥の基礎資料とする。

施肥資材：牛ふん、鶏ふん、配合肥料

試験規模：コンクリート枠施設試験

期待される効果

- ブドウ園土壌における可給態窒素の実態を把握し、診断基準を作成することで適正施肥の基礎資料となる。
- 併せて、施肥資材の可給態窒素発現量が明らかになることで、施肥量の目安がわかり、効果的な施肥が行える。このことから、資材コストの低減や環境負荷低減効果が期待できる。

【行政施策上の位置づけ】

山梨県総合計画

戦略1 攻めの「やまなし」成長戦略

「オリジナル品種の育成、高品質化の推進」